

【試し読み】

新天理図書館善本叢書

第25巻 奈良絵本集 3

(2019年4月刊行・八木書店)

解題

金光桂子・石川透

※本書の詳細は下記サイトをご参照ください。

<https://catalogue.books-yagi.co.jp/books/view/507>

『奈良絵本集三』  
解題

石川 金光  
透 桂子

## 小伏見物語

装訂 袋綴 上中下三冊

表紙 打曇表紙。見返しは金切箔を散らす。

料紙 鳥の子紙

法量 縦一六・七cm×横二四・九cm

外題 表紙左肩に金泥で下絵の描かれた題簽を貼付し、「小伏見物語 上(中)」「小ふしみ物かたり 下」と墨書する。

墨付 上冊二十七丁、中冊二十六丁、下冊二十七丁。

行数 十四行

字高 約一四・七cm

挿絵 上冊半丁七図、見開一図。中冊半丁九図。下冊半丁七図、見開一図。

書写年代 〔江戸時代初期〕写

(請求記号九一三・五一イ八三)

今を時めく貴公子と身寄りのない姫君とが結ばれるも、男性側に権門の娘との縁談が生じたために仲を裂かれ、悲恋に終わるといふ類型の物語が、中世に流行した。こうしたタイプの物語を、その典拠例である中世王朝物語『しのびね』にちなんで、「しのびね型」と呼ぶことがある。本書『小伏見物語』も、しのびね型に属する室町物語の一伝本である。

後述するように、この作品には『桜の中将』の名で知られる異本があり、物語の冒頭と結末部に大きな相違があるのだが、ひとまず本書によって梗概を記しておく。

(上册)伏見の中納言の姫君は、早くに父母に先立たれ、心細く暮らしていた。ある時、宮中の節会を見物に出かけた姫君を、桂の大納言の子息たかみちの中将が見そめ、恋しいとなる。事情を察した中将の乳母(阿波の局)は、姫君の乳母(すけの局)に相談する。中将は姫君に何度も恋文を送るが、はかばかしい返事は得られず、遂にすけの局の提案により、伏見に住む叔母からの使いと偽って姫君を自邸に迎え取り、共に暮らすようになる。中将の姉二人も姫君と対面する。やがて姫君は懐妊し、実家(大宮の御所)に戻って若君を出産する。若君が三歳の年の八月十五夜、中将は宮中の管絃の宴にて琵琶をみごとに演奏する。その姿を見た徳大寺殿が、中将を我が娘の婿にしたいと、父大納言に申し入れる。大納言は承諾し、徳大寺殿の娘に文を遣わすよう中将に強要する。結婚当夜、中将は心ならずも徳大寺邸へ赴くが、夜が明けると早々に姫君のもとへ帰る。次の夜もしぶしぶ徳大寺邸に出かけた中将は、大納言の指示によりそこに足止めされる。

(中冊)中将はいったん姫君のもとに戻り、姫君の弾く琴に笛を吹き合わせて楽しむが、また徳大寺邸へ行くことを余儀なくされる。父大納言は中将の留守中に姫君を追い出そうとし、まず若君を引き取った上で、姫君に天王寺参詣を勧める。大納言の意図を悟った姫君は、中将や若君との別れを悲しみつつ屋敷を出て、すけの局とともに難波の里へ下る。中将は数日後に戻って来てはじめて姫君の出走を知り、姫君の残した和歌を見る。中将の嘆きは深く、若君の養育を姉たちに託して、姫君の行方をたずねる旅に出る。まず天王寺に詣で、ついで

住吉の社に参籠した。

(下冊) 難波の里の尼君のもとに身を寄せた姫君は、物思いから病となる。瀕死の状態の中、姫君は中将への文をしたためてすけの局に託し、念仏を唱えつつ息を引き取る。すけの局は姫君の亡骸を荼毘に付した後、出家する。一方の中将は、住吉に参籠して七日目の夜、姫君を夢に見る。その夢告げに従って難波の里をたずねた中将は、すけの局に邂逅し姫君の死を知る。姫君の遺した文には、中将と若君を思う長歌が記されていた。中将は従者の播磨の守とともに出家し、姫君のための仏事に勤しむ。都の両親から使いが来ても追いつき返し、両親自らやって来ても会おうとしない。嘆いた両親は相次いで出家し、徳大寺殿の娘も自ら髪を切った。中将は出家してもなお心の苦しみの絶えることはなく、四十歳の頃から病となり、遂に往生の素懷を遂げた。その後、都の若君は立派に成人して父母の菩提を弔い、祖父の跡を継いで栄えた。

このように、『小伏見物語』では悲恋の末に女君は命を落とし、その死を悲しんだ男君は出家遁世する。一方、『しのびね』をはじめ、他のしのびね型の物語の多くに見られるパターンは、女君は男君との仲を引き離された後に帝に見せめられて后となり、男君はそのことを知って絶望から道心を起こし出家するというものである(男君が死亡する場合もある)。物語始発部において不遇だった女君が一転して高位に昇り、片や何一つ不自由のない境遇だった男君は社会的栄達を擲つことになるという、意外性や運命のあやにくさが、こうしたしのびね型の物語の、一種の醍醐味である。それに対して『小伏見物語』のように、女君を死なせることによってより悲劇性を強めた作品としては、ほかに室町物語の『わかくさ』、『志賀物語』などが知られている。

中でも『わかくさ』と『小伏見物語』とは、物語後半部の展開において共通するところが多い。たとえば、女君を探す旅に出た男君の夢に女君が現れて歌を詠む点、出家した男君が両親から帰京を促されても頑なに拒む点、男君が修行の末に往生を遂げたところまで語る点などは、少なくとも現存する他のしのびね型物語にはあまり見られない、両作品に特有の内容である。また、男君が新しい妻との結婚初夜から帰ってきた後、気が進まないものの後朝の歌を贈るといふ場面が、しのびね型の物語にはよく描かれているが、『わかくさ』と『小伏見物語』<sup>(1)</sup>とは、その場面で詠まれた和歌の発想や言葉遣いにおいても類似性の高いことが指摘されている。いずれかが他方に直接影響を与えたとまでは容易に判断できないものの、両者が密接な関係にあることは否定できない。

ただし、女君が死を遂げる点で一致するとはいえ、『わかくさ』の女君が自ら宇治川に身を投げて命を絶つのに対し、『小伏見物語』では心労の果てに病死するという違いがある。さらに『小伏見物語』の女君臨終の場面では、病重くすっかり気弱になった女君が、生きていれば中将と再会もできようと諭されて気を取り直したり、一度絶命しかけた時には「中将殿これへ御入候に」(下・四丁表)という言葉を聞いて息を吹き返したりと、最後まで男君を慕いつづける様子が印象的に描かれている。一方、『わかくさ』の女君は、新妻のところに足止めされて姿を見せなくなった男君を、心変わりしたものと誤解し、入水する直前までそのことを嘆いていた。しのびね型の物語においては、男君のもとを逐われた後の女君の心中に、男君への不信や恨みと、それでもなお断ち切れない思慕の情とが交錯するのが常である。『小伏見物語』の女君に、男君に対する負の感情がまったく見られないわけではないが、相対的に見れば男君への一途な思いが強調されており、その点は本作品の一つの特色といえよう。

さて、先に少し触れたように、本書には別の題名をもつ異本があり、あらずしも一部大きく異なっている。本書と同じ作品の伝本は次の三類に分類され、本書はこのうちB類に属する。

- A類 「桜の中将物語」と題する写本（国立国会図書館蔵本のみ）
- B類 「小伏見（物語）」と題する奈良絵本（詳細は後述）
- C類 「さくらの中将」と題する刊本二種（寛文十年本問屋刊・寛文十年松会刊）

この三類の関係については、松本隆信氏に、梗概と本文とを詳細に比較した論考が備わる。<sup>2)</sup>以下、松本氏の所説を私に要約する形で紹介する。

まずA類とB類との主な相違点は、物語冒頭がA類は男君の紹介からはじまるのに対し、B類は女君の紹介を先に置く点、また、結末において女君が亡くなるB類に対し、A類では住吉明神から賜った霊薬によって女君が蘇生し男君と幸せに暮らすことになる点である。後者については、幸福な結びの物語をあえて悲恋に変えるとは考えがたく、B類の方が本来であろう。『わかくさ』にも同様に、ハッピーエンドに改作した異本がある。一方、前者については、B類は冒頭で女君の父親の名を「伏見の中納言」としていたのに後文では「大宮の大納言」とする（A類では初めから「大宮の大納言」、「桜の中将」という男君のあだ名が物語の途中で唐突に登場する（A類は冒頭でその呼称を紹介する）といった矛盾が生じている。そのほかにもB類の本文には細かな齟齬や不自然な記述が目立ち、結末部を除けばむしろA類の方が古態であろう。C類は叙述が大幅に簡略になっているが、冒頭はA類に、結末はB類に近い。以上を総合すると、現存する諸本より古い形態の本がかつて存在し、A・B・Cの三類はそこからそれぞれ別途に分かれ出たものと考えられる。

右のように、より古い形態の本―男君の紹介からはじまり、女君が死去するという結末をもつ本―の存在を想定する松本氏の見解は、現存諸本のあり方から判断する限り妥当であろう。B類は女君を冒頭に紹介することで、女君中心の物語とすべく改変を試みたものかと思われるが、その方針が全体に一貫しているとはいえないようである。

B類の諸本としては、本書のほか次の二点が知られている。

- ・慶應義塾図書館蔵『こふしみ』 横型奈良絵本 三冊（『室町時代物語大成』五、慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション）（以下、慶應本）
- ・東京大学文学部国文学研究室蔵『伏見中納言』 横型奈良絵本（挿絵欠・下冊欠） 二冊（国文学研究資料館・新日本古典籍総合データベース DOI 10.20730/100010493）（以下、東大本）

これら三種の伝本は、いずれも横型、三分冊という共通点をもつばかりでなく、分冊や挿絵の入る箇所も一致している。挿絵を欠く東大本を除き、本書と慶應本は挿絵の構図も似ている。本文も内容に大きく関わるような異同はないが、細かく見れば、本書と東大本の間に共通異文がやや多く、その半ば以上は本書・東大本側の誤脱かと思われる。本書・東大本―慶應本の形で、例を示しておく。

いと、御こゝろおほしめし（上・八丁表）―いと、御心くるしくおほしめし  
 た、一人かほとによそく〜などへはいか、（上・十八丁表）―た、一人にて候へはよそく〜な

とへはいか、

さらに本書には、独自の誤写や脱文が散見し、上冊には六行分ほどの目移りによる衍文も見られる(上・七丁表四行目〜十行目)。本文の質という点では、本書は慶應本に劣るといわざるを得ない。

しかし、本書の絵本としての制作時期は慶應本より遡ると思われ、挿絵も古雅な趣を有している。上・中・下冊の各々に二面連続の図が一箇所ずつあり(ただし中冊のみ見開でなく丁の表裏)、それぞれ宮中の管絃の場面、中将が旅宿で月を眺めつつ姫君を思う場面、中将が難波の里で姫君の死を知った場面と、見所のある図柄が選ばれているようである。画面の上下には、水色・桃色に塗られた、波形の輪郭線をもつ不定形の霞が描かれ、画面に変化を与えている。ただし霞の様式は一樣ではなく、直線形や、輪郭線が二重になったものも見られる。本文料紙に書き切れなかった本文が挿絵の丁に進出することもあり、その場合、挿絵は本文をよけて描かれる。なお挿絵の丁の一部は半分近く破損しており、後に補修されている。

挿絵の中で注目されるのは、下冊最後の図(下・二十七丁表)である。そこには夫婦らしい貴族の男女と幼児、それに女房たちが描かれている。一方、物語本文で最後に語られるのは、男女主人公の遺児である若君が成人して家を継ぎ、亡き父母の菩提を手厚く弔ったことである。その若君が妻を迎え、子宝にも恵まれたことを、この挿絵は表現しているのであろうか。ただ、そうした事柄は本書の本文には記されておらず、本文と挿絵との対応関係に不審が残る。とはいえ、一家の繁栄を言祝ぐこのような挿絵は、めでたしめでたしの大団円で終わる物語の末尾には、よく見られるものである。<sup>(3)</sup> 本文の内容からは逸脱するものの、悲恋の物語であっても最後はめでたく閉じるべく、そうした典型的な図柄を借りてきたのかもしれない。

(金光桂子)

【注】

- (1) 三角洋二『物語の変貌』(若草書房、一九九六年)。
- (2) 松本隆信「擬古物語系統の室町時代物語―「しぐれ」「若草」「桜の中将」「志賀物語」外―」(『斯道文庫論集』四、一九六五年三月)。
- (3) たとえば本叢書『奈良絵本集』二に所収の『小男の草子絵巻』や、同じく五に収録予定の『いはやものがたり』など。

## ひだか川

装訂 袋綴 一冊

表紙 原装は打曇り、その上に表紙を後補。

料紙 鳥の子紙

法量 縦一七・三cm×横二三・七cm

外題 題簽中央後補墨流紙「ひたか川」

内題 なし

墨付 十八丁

行数 十五行（一部十六行の丁あり）

字高 約一三・五cm

挿絵 半丁十六図、見開三図。

印記 「紫景文庫」「豊（黒印）」

書写年代 「江戸時代初期」写

（請求記号九一三・五一イ一三九）

『ひだか川』は、一般的には御伽草子『道成寺縁起』の異本とされている作品である。『道成寺縁起』の諸伝本は、松本隆信「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」（『御伽草子の世界』所収、一九八二年、三省堂書店）の「道成寺物語」によれば、大きく三つの系統に分かれる。松本は、最も原初的な道成寺蔵本をA系統とし、それより後の成立と考えられる天理本『ひだか川』を含む「賢学草子」をB系統とし、江戸時代の版本を中心とした伝本群をC系統としている。江戸時代中期には、これらの系統が複雑に絡む内容の作品も多く制作されており、諸伝本の分類も書名の特定も簡単にはできないのが現状である。

本作品は、後補題簽に記された「ひたか川」という題名として知られているが、遊紙裏右上に「かねまき」という古い文字が見えるように、ある時期には「かねまき」と呼ばれていたと考えられる。この文字を含む紙は、表紙と見返しの間に挟まれていたもので、修復の際に発見され、現状に仕立てられたものである。このような文字は、表紙と見返しを付ける際に間に挟まれて見えなくなってしまうが、制作時の仮の表紙等に題名として付されることがある。ちなみに、「かねまき」という名前は、最後に『道成寺縁起』の内容が長文で記される奈良絵本『磯崎』（石川透蔵本）の挿絵の裏に記されている書名と同じである（『室町物語影印叢刊』三、二〇〇一年、三弥井書店）。

それでは、『道成寺縁起』の中で、『ひだか川』はどのような作品であるのかを見てみよう。概略は以下の通りである。なお、本書の翻刻は、『室町時代物語大成』一一（一九八三年、角川書店）に掲載されている。

近江国三井寺の法師である賢学は、遠江国橋本へと向かう。賢学は、そこにいた幼い姫君を刺し殺し逃げ失せた。しかし、都から下っていた典薬の治療により、姫君の命は救われる。姫君が十六歳の時、父の行方を捜すために、都へ上ることになる。姫君が清水寺へ参詣し通夜をしていると、同じく通夜をしていた男と和歌のやり取りをし、それがきっかけとなり、

二人は深く契りを結ぶことになる。男は賢学であったのだが、ある夜、この女との会話から、かつて自分が刺し殺したはずの女であることが分かり、悪い因果を感じ、女の元を離れ、修行に出て紀州那智の滝に至り、滝行をする。しかし、女が側にいる感覚が取れず、そこも離れて日高川を渡し船で渡ろうとすると、女が現れ、川を渡って追ってこようとす。女は川に入ると、顔から徐々に蛇体へと変化し追いかけてくる。賢学は、寺に入り、鐘の中に隠れるが、蛇体となった女に捕まり、そのまま日高川へと連れて行かれる。その後、賢学の弟子が経を唱えて賢学を弔った。

右の内容は、『道成寺縁起』A系統の道成寺蔵本とは、以下の点が大きく異なっている。道成寺蔵本では、男主人公は奥州の修験者で、女主人公が紀州に住む年長の女とされ、道成寺の名が多く出てくるのに対し、『ひだか川』では、男主人公は近江三井寺の法師で、女主人公は遠江橋本に住む少女であることから始まり、道成寺の名は登場していない。細部の違いは数多くあるが、松本の伝本分類が示す通り、最初にA系統が成立し、その後この『ひだか川』を含むB系統が成立したと考えるのが良いであろう。

では、このB系統のうち、天理本は、どのように位置付けられるであろうか。B系統の主な伝本は、土佐広周筆とされる酒井家旧蔵本（『新修日本絵巻物全集』一八、一九七九年、角川書店）と、『賢学草子』と仮題が付された根津美術館蔵本（『御伽草子絵巻』、一九八二年、角川書店）である。本書は、本文的に酒井家旧蔵本に近く、根津美術館蔵本とは、校異も取りづらいほどに遠い関係にある。

ここで、本文的にも近い酒井家旧蔵本と天理本の本文の一部を列挙して比較してみよう。二人が清水寺で和歌のやり取りをする場面である。なお、酒井家旧蔵本は、影印紹介されているが、白黒縮小版であるために読みづらいので、その後代の写しと思われる白田家旧蔵本（白田甚五郎「日高川雙紙をめぐって」『野州国文学』八、一九七一年）をも参照した。

#### 酒井家旧蔵本

おなしくつやの人の中に、いかなる人にかありけん、とりあへず、たとふかみにかきて、

音なしのたきたにあるにをと山ななれ出ぬる袖とたも見よ

とあるを、これも、さすか、うちをきかたくて、

かことにもなにかたのまむ山水のあさくやをとにたてんとおもひし

この返しを見るにも、いまはひた、けてこそ、おもひ侍りける

#### 天理本（八丁裏／九丁表）

おなしくつやの人のなかに、いかなる人にやありけん、とりあへず、た、うかみにかきて、

おとなしのたきたにあるをおとこ山ななれいてぬるそとたにみよ

これも、さすか、うちをきかたくして、

かこと、もなにかたのまん山みつのあさくやをとにたてんとおもひし

此返しをみるにも、いまはひたさらにこそ、おもひはんへりけり

このように、平仮名漢字の違い以外に若干の違いはあるものの、基本的には同系統の本文と考えて良いであろう。伝承ではあるが、酒井家旧蔵本は土佐広周筆とされており、天理本よりも古



い写本であると思われる。ただし、酒井家旧蔵本は、その多くの模写本を含めて、前半を大きく欠いているのである。天理本は酒井家旧蔵本の欠落を補う伝本であるといえることができる。

ただし天理本も、その冒頭を欠いていると考えられる。概略に示したように、天理本は賢学が都から下る道行きから始まっており、その紹介や下向に至るまでの話が記されていないのである。天理本自体は、冒頭部分が欠けているように見えないので、元になった本が既に当該部分を欠いていたと思われるが、天理本自体が冒頭を欠損した可能性も完全には否定できない。

天理本には、奈良絵本の制作を考える上で、重要な資料が残されている。本を制作する場合には、書写上の失敗が付きまとう。普通は、その失敗した反故紙は残されないが、表紙を補強するために表紙と見返しの間に挟み込まれていることがある。天理本の場合は、現状では本文の終わりに綴じられているが(二二〇頁)、近年の修復の際に仕立てられたものであり、本来は表紙の見返しの間の厚紙として利用されていた。

その反故紙の本文は、消そうとした墨線はあるものの、以下の通り読むことができる。

此返しをみるにも、いまはひたさらにこそ、おもひはんへりけり

この内容は、明らかに、前に酒井家旧蔵本との比較として掲出した部分の最後と同じである。影印で比較すれば分かるように、反故紙の方には絵は描かれていないが、本文については、使用している変体仮名や行変えの位置、さらには筆跡まで同じである。このような反故紙が出てくる場合には、同じ人物の筆跡であっても、使用する変体仮名や行変えの位置は微妙に異なることが多く、この天理本の場合は、たった二行のみということもあって、全く同じように写しているのである。

そして、反故紙には、絵が描かれていないことからすると、天理本の場合には以下のことが明らかになるのである。天理本には、挿絵のある頁には本文(画中詞)が書かれていることがあるがよく見ると、本文全体と同じ大きさの場合と、特に絵の霞の部分に記された小さい文字の場合とがある。霞の小さい文字の下には絵の具が塗られているので、この小さい文字は、明らかに絵を描いた後の書き入れである。

それに対して、特に挿絵の頁の右方に書かれた普通の大きさの文字は、絵を描く前に書かれたことが、この反故紙の存在によって理解できるのである。霞の上に書かれた小さい文字と、他の普通の文字の筆跡は同じである。ということは、最初に本文を記し、本文が短く終わる頁については絵を描き、さらにその後、本文を書いたのと同じ人物が小さな文字で霞の上等に書き込みをした、ことになる。

普通に考えれば、絵を描くのは本文を書く人物とは別であるが、このような場合には同じということがも考えられる。別の人物であっても、絵師と筆耕(本文の書写者)は近い関係であったことが想像できる。だいたい、挿絵に本文が入る画中詞は、江戸時代初期以前に制作された奈良絵本や絵巻の特徴であるが、少し後の江戸時代前期になると、画中詞はなくなり、絵と本文は別々に制作していたと考えられるのである。

奈良絵本の制作という問題については、本書の本文の筆跡も重要な資料となる。既に橋本正俊が、本書と京都大学本『かむ丞相』等と本文の筆跡が一致していることを指摘しているが(『かむ丞相』解題)『京都大学蔵むらちものがたり』一一、二〇〇一年、臨川書店)、他にも石川透蔵『正文草子』や『静』等に、同じ筆跡の奈良絵本が存在しており、明らかに大量に奈良絵本を制作する

絵草紙屋によって、作られたことが分かるのである。江戸時代初期の絵草紙屋については、未だに不明な点も多いが、本書が研究の重要な手がかりになることは間違いない。

なお、天理本を含む酒井家旧蔵本系統の絵画部分に注目した論文に、千野香織「日高川草紙絵巻にみる伝統と創造」〔金鯢叢書〕八、一九八一年〕があり、松本が分類したB系統を「日高川草紙」と名付けて論じている。

以上のように、天理本は、酒井家旧蔵本の欠落を補う伝本であること、江戸時代初期の奈良絵本の制作過程を考察する上で重要な資料であること等が分かるのである。

(石川透)